

## 忘れ難きもりそばベーコン 偏屈先生百間の戦中餓鬼道

第二次対戦中から戦後にかけての飢餓地獄は、これを体験した者でなければ語れない。

△昭和十九年ノ夏ノ初メ、段々食ベルモノが無クナツタノデセメテ記憶ノ中カラ、ウマイ物、食ベタイ物ノ名前ダケデモ探シ出シテ見ヨウト思イツイテ、コノ目録ヲ作ツタ▽

こんな切ない注釈が始まる、内田百間の「餓鬼道着蔬目録」がきどうちゆうそくは、文字通り、食べたいもの、おいしかったものをメモ風に八十品目ほど列記しただけのものだが、なまじ思い出話などで味付けしてないだけに、かえって百間の「渴望」が迫ってくる。

百間は、明治二十二年（一八八九）岡山市の造り酒屋に生まれたが、父の代に家運が傾いたのは、父がひとえに酒を飲みすぎたためだと信じる祖母に強く酒を戒められて育った。

が、大正五年、陸軍士官学校教授としてドイツ語を教え始めるや、これで曲がりなりにも一人前！」と父親譲りの酒豪ぶりを発揮する。

なかでも、ビールはとりわけ好物で「麦酒がなければ、ないというためになおの事、飲みたくなる」始末。そのビールを決して「ビール」とは書かず、漢字の「麦酒」で押し通したのは有名な話である。

旧制第六高等学校時代、夏目漱石に写生文「老猫」を送ったところ、丁寧な批評を得たこ



とから門下に入り、深く影響を受けるが、晩年は、「百鬼園隨筆」や「阿房列車」シリーズ「御馳走帖」など、エッセーの名手として名を上げた。

百間は、決して食い道楽の人ではなかったが、フランス料理のフルコースの後、仕上げにカレーライスを平らげるような特技の持ち主で、前記の「目録」でも、オ（ツ？）クスタンの塩漬け、牛肉の網焼き、ポークカツレツなど、一応ノーマルな嗜好をみせながらも「以上列記したるは

①いつも食べていたもの  
②人から贈られ、その味・忘れ難きもの  
③昔の味で思い出すもの など」だとし、いつも食べていたものの例として、なんと「もり蕎麦ベーコン」なる珍味を特記、定評通りの「偏屈ぶり」を暴露しているのである。